

U. Weckel, C. Opitz, O. Hochstrasser, B. Tolkermitt (Hg.),
Ordnung, Politik und Geselligkeit der Geschlechter im 18. Jahrhundert.

弓 削 尚 子

啓蒙主義における「学者の共和国」は純粋に男だけの派閥であった——イギリスの社会史家ロイ・ポーターは、1990年代初頭にこう述べている。¹⁾啓蒙期に活躍した「女学者」の名は、ニュートンの『プリンキピア』を訳しフランスに紹介したエミリー・ドゥ・シャトレ (1706-1749)、ポローニャ大学で博士号を取得し、物理学の分野で教鞭をとったラウラ・バッシ (1711-1778)、ドイツ人女性としてはじめて医学博士となったドロテア・エアクスレーベン (1715-1762) など、それなりに挙げることができる。しかし、こうした学識ある女性たちは、決して主流をつくる存在ではなく、啓蒙のヨーロッパ各国にみられた「学者の共和国」は、結局のところ男たちの主導によるものであった。

しかし、1998年に四人のドイツの女性史・ジェンダー史家によって編まれた本書を手にとると、男性文化としての啓蒙主義を糾弾し検証する段階はすでに終わったようだ。少なくとも本書の執筆者たちは、啓蒙主義に女性排除の観点からアプローチするのではなく、多様な男女の関係性を問うジェンダー史のテーマとして取り組もうとしている。

この取り組みに参加した14名の女性の研究者たちは、歴史、文学、哲学、カルチュラル・スタディーズなどの専門をバックグラウンドにしている。もともと18世紀の女性研究は、「ゲーテをめぐる女性たち」という古典的テーマにみられるように、かなり早くから文学の分野で展開されていた。啓蒙期に関する女性史・ジェンダー史研究が文学研究に多くを負い、協力関係をもってすすめられたことは、本書においても見て取れる。たとえば、詩人のフリードリヒ・G・クロップシュトック (1724-1803) やアウグスト・ビュルガー (1747-1794)、クーアラントの女性作家エリーザ・フォン・デア・レッケ (1754-1833)、女性による女性のための雑誌を発行したマリアンネ・エーアマン (1755-1795) といった存在は、18世紀の文学を研究する者にとっては馴染みのあるものであろう。本書では、彼ら、彼女たちが残した「作品」ではなく、書簡がもっぱら取り上げられるが、それは、個人や小さな人間集団というミクロな単位から、マクロな歴史を再考するための「私的記録 (Ego Dokumente)」として重要な歴史資料とみなされているからである。女性研究においてもジェンダー研究においても、歴史学や文学といった既存の学問分野の敷居を越えた学際性が目指されているのである。

本書は14篇の論文からなり、第一部「宮廷と都市の教養エリートにおけるジェンダー秩序と男女間の社交」と第二部「啓蒙の言説から政治的实践へ」に編成されている。執筆

1) Roy Porter, *Kleine Geschichte der Aufklärung*, Berlin 1991 (engl.1990).

者たちは、新たに史料を掘り起こし、あるいは従来の史料テキストを読み直して、18世紀のジェンダー研究というパッチワークを色鮮やかに縫いあげている。その文様を紹介すると、第一部には、「モンテスキューの『法の精神』にみる男女の政治と社交」、「宮廷における自己演出と性別役割」、「1750年のポドマーとクロップシュトックにおけるいさかいのジェンダー史的な意味」、「エリーザ・ハーンとアウグスト・ビュルガーのたくみに演出された結婚への道」、「啓蒙の社交における宗教」などが取り上げられ、第二部には、「トーマス・ホプズにおける性差の位置付け」、「啓蒙の時代における男の生殖神話の終焉」「ポリツァイ(警察=行政)と母性」、「売春と都市の公共性」など多彩なモチーフが並ぶ。

第一部の共通テーマのひとつの柱である「ジェンダー秩序」Geschlechterordnungは、近年、日本でも耳にする用語である。社会秩序には、男とか女といった性規範が不可欠なものとして組み込まれている。その認識を喚起するこの用語は、ドイツでのジェンダー研究ではすでに定着した概念である。もう一つの柱である「社交」についても、説明が必要であろう。本書では、啓蒙主義を「コミュニケーションのプロセス」として考察する歴史家ハンス・エーリッヒ・ベデカー²⁾からヒントを得、18世紀に男女の間で多様に繰り広げられたコミュニケーションのあり方に焦点を合わせている。「社交」の具体的な対象として、今日ではすでに研究が蓄積されている読書協会やサロンという社交組織とは異なった、「制度化されていない自由な男女のつきあい」が設定されている。たとえば、都市の知的エリートと地方の大商人の「開かれた家」にそれぞれ定期的に集う男女の社交を比較対照したり、あるいはドイツ各地を旅した女性にスポットをあて、彼女が訪れた啓蒙知識人や旅先で出会った人間との気さくな会話に、男女の区別なき話題を読み取るといった研究が収められている。つまりここでいう「社交」とは、フランスの社会史研究が開拓したソシアビリテの概念に、ジェンダー的視点をあわせもったものと理解しても差し障りはないだろう。

第一章で、評者にとって最も読み応えがあったのは、H. マイゼによる宮廷社会のかん通をめぐる論文である。1770年代後半、ヘッセン＝ダルムシュタットの宮廷では、方伯(ランデスグラーフ)の若き奥方のスキャンダルが物議を醸していた。方伯よりも30歳若い方伯夫人が市民層出身の顧問官兼傭兵隊長と情事を重ね、妊娠したのである。この件に関して方伯自らが記した記録帳(カレンダー)、方伯が「公的に」命じた法的な調査の文書、そして顧問官である夫を寝取られた妻が方伯に向けて書いた「私的な」請願書という三つの異なった史料が比較、分析されている。これにより明らかにされるのは、「公人」として方伯が夫人について綴った「私的」テキストと、方伯に対する大逆罪を追及した公的言説と、夫に裏切られた「うぶな」妻の「けなげな」訴えの、それぞれの語りの違いである。さらに、宮廷における男女のふるまいやセクシュアリティ、「政治的な」男女関係、宮廷で上昇していこうという野望をもった一人の市民男性とその妻の目を通してみえてく

2) Hans Erich Bödecker, Aufklärung als Kommunikationsprozeß, in: *Aufklärung* 2, 1987, S.89-111.

る宮廷社会と外の世界との接点が、鮮やかな筆致で描かれている。ここで提示されている「社交」は、社会層の差異とジェンダーの差異が複雑に絡み合っている。顧問官である市民層出身の夫は、方伯夫人が望むならば、自宅にもお通しする。市民の妻は、夫の愛人とわかっていても、方伯夫人に対する敬意を示さなければならない。彼らのやりとりが、文字史料からリアルに聴こえてくる。夫は宮廷の言葉であるフランス語を操ることで、方伯夫人との関係に妻が干渉することを阻止しようとする。しかし、この妻がフランス語の教養をもっていることから、彼の思惑は失敗に終わる。方伯夫人が妻に対しフランス語で侮蔑の言葉を投げ、妻はすべてを見通しながらも礼儀を失することなく応対する。彼らの生々しい「肉声」の再現は、文学研究者マイゼの手腕であろう。

この論文集全体が達成したものを考えてみると、特定の社会層ではなく複数の社会層を対象として18世紀研究を行ったことではないだろうか。近代市民社会の性規範を考える場合、台頭しつつある市民的階層(die Bürgerlichen)に重点がおかれる傾向が根強いが、本書はこのような市民層が自らのアイデンティティを確立するために線引きをした宮廷社会や、都市の下層民を取り上げた研究に富んでいる。マイゼの研究をはじめ宮廷に関する論文は、「私人の公共圏」、「公人の親密圏」を考えるという問題意識が貫かれている。他方、第二部に収められているO. ホッホシュトラッサーやD. ヒュフトカーの論文は、都市の下層民に目を向けている。

地域社会史やミクロ・ヒストリーの手法を得意とするホッホシュトラッサーは、18世紀末に居城都市カールスルーエで行われた貧困政策を取り上げ、一見、性に中立的な言説で実践されているこの政策が、実は下層の女性の教育と規律化を目指していたことを明らかにした。そもそも啓蒙知識人たちは、「公共の善」を生み出していこうと、都市の貧困救済に高い関心をもっていた。人口政策と道徳政策の観点から彼らが注目したのは、私生児や未婚の母、内縁関係の増加である。下層の女性は、男性よりも多く貧民リストに名を挙げられ、救貧院に収容されると、伝統的な女の仕事である糸紡ぎが課せられた。改革運動の担い手と、その対象の関係は、ジェンダーの力関係と無縁ではない。18世紀末にはドイツ各地で貧困政策が着手され、カールスルーエはそのひとつの例にすぎず、今後、他の都市を対象にした研究が蓄積されれば、啓蒙期の社会政策におけるジェンダー・バイアスが指摘されていくであろう。こうした研究を前に、「貧困はいかに女性と結びついているのか」Wie weiblich ist die Armut? という言いまわしが思い出され、18世紀研究における「貧困と女性」という分野の掘り下げが期待されるのである。

同じ下層民を対象としたものでも、ヒュフトカーは、18世紀末から19世紀半ばにかけてのベルリンにおける売春取り締まりのプロセスを追っている。19世紀初頭には「売春」Prostitutionの語は用いられず、もっぱら「不道徳な行為」Unsittlichkeitや「ふしだらな行為」Liederlichkeitが売春取り締まりの議論には使われたという。売春は何よりも公的な道徳の問題であり、実際、その規制には、都市という公共空間における風紀と安全が強調されている。19世紀に入ると、都市行政という観点から、警察ばかりでなく市当局が取り締まりに積極的に介入し、さらには売春婦が生活する地域の住民たちも「ふしだらな女た

ち」に対して声をあげる。「モラルに反する」売春婦と「敬うべき」女性たちの住み分けが必要である、といった意見も強く出されるようになる。ただし、このような論点は、すでにパリの娼婦に関する研究でも示されており、格別新しいものではないであろう。ヒュフトカーの実証的な研究で興味深いのは、売春をめぐる言説主体の変化である。かつて売春婦たちは、市当局や警察に自らの権利や要求を主張し請願書を出すこともあったという。しかし、都市の風紀化の必要性が声高に議論され、それが「公的なもの」となればなるほど、売春婦たちの声は打ち消されていったのである。

ところで、女性の主体という観点から考えれば、身分制社会において女性が享受していた法に関する考察は貴重である。周知のように、ヨーロッパ近代法において女性は法の主体となることを拒まれていた。しかし、近世においては、その限りではなかった。S. イェニッシュは、19世紀前半までドイツ各地域にのこっていた女性の経済的な活動を保護する後見人制 *Geschlechtervormundschaft* という法制度を扱っている。この制度によって、手工業者や農民の女性たちは、結婚時にもってきた自分の財産を管理し、これを担保にしたり、大きなお金の動く売買などを行っていた。イェニッシュが調査したヴュルテンベルク大公国では、不動産売買や相続の件で、未婚、既婚を問わず女性が後見人と共に法廷に立った裁判記録が多く残されている。後見人は、女性自らが選び、通常、市参事会や法廷関係者、あるいは兄弟や親類に依頼したという。これは、場合によっては夫の権利が制限されるということにもなりえた。また「女の特権」*weibliche Freiheiten* というものがあり、もし結婚時に持参した財産が危うくなった場合、女性は、申し出れば結婚の共同財産を解約できるというものであった。経済活動における女性の自律が見出され、19世紀の市民女性のあるべき姿と対照をなしている。

このように多様な社会層のジェンダーに考察の射程を広げた研究は、19世紀の市民社会におけるジェンダー秩序を相対化し、議論を深めるのに有益である。他にも、本書では、モンテスキューやトマス・ホブズという大思想家にジェンダーの視点をつきつけて、「名著」と呼ばれるものの読みかえを行う論考がおもしろい。とりわけモンテスキューの『法の精神』に現れている男女の社交にみる「礼節」の文明化や、女性の政治的影響力の危険視といった議論は、ヨーロッパ啓蒙主義における男女の「政治」や社交の核心をついている。

本書の標題は、『18世紀におけるジェンダーの秩序・政治・社交』である。「秩序」や「政治」という概念が男女間の権力構造や支配関係を前面に押し出すのに対して、「社交」という概念に当初、違和感を覚えるかもしれないが、以上見てきたように、これもまた、男女の関係性を突きとめる重要なファクターなのである。この論文集において、多彩なテーマで縫い合わされたパッチワークは、情報が豊富で色鮮やかな反面、18世紀ドイツのジェンダーの全体像を構築するには雑駁な印象をなしていることも否めない。テーマの選択と方法論上の全体のバランスが理想的なものではないことは、おそらく編者自身も感じているのではないだろうか。

編者四名のうち、クラウディア・オーピッツとウルリーケ・ヴェッケルは、本書発表の

二年後に再び組んで「啓蒙主義のジェンダー言説と女性の生活世界」に関する論文集を編んでいる。³⁾ さらに2000年には、レクラム書店からジェンダーの視点を包含した啓蒙主義の概説的な力作も発表された。⁴⁾ ドイツにおける18世紀のジェンダー史研究は、近年ますます活況に満ち、啓蒙主義研究全体の地平を広げている。

Wallstein Verlag, Göttingen 1998. 367 S.

3) Claudia Opitz, Ulrike Weckel, Elke Kleinau (Hg.), *Tugend, Vernunft und Gefühl. Geschlechterdiskurse der Aufklärung und weibliche Lebenswelten*, Münster u.a. 2000.

4) Barbara Stollberg-Rilinger, *Europa im Jahrhundert der Aufklärung*, Stuttgart 2000.